

光源氏、深夜に突然訪問し若紫を連れ去る（源氏物語・若紫）

小柴垣から垣間見た若紫（Ⅱのちの紫の上）は病気がちの「君」や「少納言の乳母」たちと生活をしていた（教科書参照）。若紫は源氏の意中の人、藤壺と似ていて興味をもったのだ。源氏は若紫を引き取りたいと尼君に何度も申し出、また訪問したが、尼君は断っていた。尼君は一年もたたず亡くなった。若紫の父の兵部卿宮が若紫を引き取るようになっていたが、宮の後妻の継子いじめが心配だと召使の女房のなかには懸念する人もあった。源氏は若紫を宮に引き取られる前に盗み出すことを決めた。宮が明日迎えに訪れるとの情報を得た深夜、源氏は惟光を連れて若紫の家の門を叩いた。

門うち叩かせ給へば、心知らぬ者の開けたるに、御車をやをら引き入れさせて、大夫、妻戸を鳴らししてしはぶけば少納言聞き知りて出で来たり。「ここにおはします」と言へば、「幼き人は大殿籠もりてなむ。などか、いと夜深うは出でさせ給へる」と、もののためよりと思ひて言ふ。「宮へ渡らせ給ふべかなるを、そのさきに聞こえ置かむとてなむ」とのたまへば、「何ごとにかはべらむ。いかにかはかきしき御答へ聞こえさせ給はむ」とて、うち笑ひてあたり。

君入り給へば、いとかたはらいたく、「うちとけて、あやしき古人どものはべるに」と聞こえさす。「まだ、おどろい給はじな。いで、御目覚ましきこえむ。かかる朝霧を知らでは寝るものか」とて入り給へば、「や」とも、え聞こえず。

君は何心もなく寝給へるを、抱きおどろかし給ふに、おどろきて、宮の御迎へにおはしたると寝おびれて思したり。御髪かき繕ひなどし給ひて、「いぎ、給へ。宮の御使にて参り来つるぞ」とのたまふに、「あらざりけり」と、あきれて恐ろしと思ひたれば、「あな、心憂。まろも同じ人ぞ」とて、かき抱きて出で給へば、大輔、少納言など「こは、いかに」と聞こゆ。「ここには常にもえ参らぬがおぼつかなければ、心やすき所にと聞こ

1 源氏の乳母子である惟光

2 若紫の乳母、若紫はこの乳母ほか少数の召使いの女房達と暮らしている。

えしを、心憂く、渡り給へるなれば、まして聞こえがたかべければ。人一人参られよかし」とのたまへば、心あわたたしくて、「今日はいと便なくなむはべるべき。宮の渡らせ給はむには、いかにきまにか聞こえやらむ。おのづから、ほど経てさるべきにおはしまさば、ともかうもはべりなむを、いと思ひやりなきほどのことにはべれば、さぶらふ人びと苦しうはべるべし」と聞こゆれば、「よし、後にも人は参りなむ」とて、御車寄せさせ給へば、あさましういかさまにと思ひあへり。若君もあやしと思して泣い給ふ。少納言とどめきこえむかたなければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、自らもよろしき衣着かへて乗りぬ。

二条院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下り給ふ。若君をばいと軽らかにかき抱きて下ろし給ふ。少納言、「なほ、いと夢の心地しはべるを、いかにしはべるべきことにか」と、やすらへば、「そは、心ななり。御自ら渡したてまつりつれば、帰りなむとあらば、送りせむかし」とのたまふに、笑ひて下りぬ。にはかに、あさましう、胸も静かならず。

問1 傍線a・b・cはそれぞれ誰（が言ったの）か。

問2 傍線dの主体とこの文脈での意味は何か。

問3 傍線e・f・gを訳せ。またfは何が「あらず」なのか。

問4 傍線hは何が「苦し」いのか。

記号のない傍線は読解に際して注意したほうがいい単語です。解答はダウンロードしたホームページにあります。大塚。